

東亜同文書院出身者と日中関係

霞山会特別顧問 小崎 昌業

小崎

小崎でございます。私に与えられたテーマは「東亜同文書院出身者と日中関係」でございますが、発表時間が四分というところで、この間に話が終われるかどうか心配しております。たまたま今朝の新聞に、宋美齡が亡くなったと出ておりました。蒋介石夫人であった宋美齡は一〇六歳でニューヨークで亡くなったとありますが、実は私、戦後中華民国（台湾）の日本大使館にいた時、蒋介石総統と宋美齡夫人には何度かお会いしたことがございます。私は中国の青島で生まれまして、蒋介石が国民革命軍を率いて北伐をやった時の状況なんかも、子供でしたが覚えております。中国では一九世紀末から二〇世紀後半まで動乱の時代が続いておりましたが、その最後の歴史的な生証人である宋美齡が亡くなりました。たまたま宋美齡のお姉さんの宋慶齡は孫文の夫人でしたが、今日はその孫文先生のお話も藤井先生からいただくわけで、何か因縁めいたものを感じます。

一、さて、「書院出身者と日中関係」でございますが、我々書院生がいた時期の日中関係というのとはどんな時代だったのでしょうか。最初にちよつとそれに触れたいと思います。ご承知のように一八四〇年の阿片戦争による香港島の英国への割譲、西欧列強の中国蚕食、すなわち領土の割譲、不平等条約の強要、租界の設定など、中国の半植民地化が始まります。日清戦争によって清国がその弱体ぶりを露呈すると一八九八年、ロシア・ドイツ・イギリス・フランスといった列強は、一挙に遼東半島、山東半島、九龍半島、広州湾等の要衝の利権を要求してこれを獲得しました。

それに引き続いて一九〇〇年義和団の乱が八カ国連合軍の北京侵攻をもたらします。これはついに西欧列強の間に中国の共同管理、あるいは中国分割の論議を巻き起こすことになりました。このような激しい情勢の中で創立された東亜同文会は、日中兩國を唇齒輔車の運命共同体の関係と捉えて、その綱領を「支那（中国）の保全」としたわけです。

知大東亜同文書院大学記念センター
設立10周年記念シンポジウム

同文書院の軌跡と日中関係への展望

同文書院・東亜同文書院・慶山会・ICCS(東知大国際中国学研究中心)



明治から大正にかけては、東亜同文会および東亜同文書院の出身者にとつて、この綱領はおおむね順調に、活動の中で展開できた時代でした。この時代は書院出身者にとつて最も幸運な時代であったかも知れません。このような状況は昭和時代に入ってもしばらく続くのですが、やがて日本は満洲事変、上海事変等を経て日中全面戦争へ突入し、東亜同文会が創立以来標榜してきた「日中輯協（友好協力）」という崇高な理想と、輝かしい伝統は、その栄光を遮られるという状況になりました。

日本は明治維新以降、近代国家の建設に努力し、日清・日露の両戦役に勝利を取めた結果、満蒙にいわゆる特殊權益を確保することになります。そして第一次大戦に参戦し山東半島のドイツ領を占領しますが、二一か条問題を契機として中国に激烈な反日運動が展開されます。折しもニューヨークを基点とする世界大恐慌が、慢性的恐慌状態にあった日本を直撃し、日本の農村の極度の不況、失業者の増加等、大きな社会不安を招来します。そこで政党の腐敗や財閥の横暴を憎み、国家改造を図る国家主義者のテロ行為というものが相次ぎ、五・二五事件、二・二六事件が起きます。その結果日本の軍部が台頭して、無謀な日中戦争・大東亜戦争に突入しますが、敗戦に終り、結局明治維新以来築き上げた国力と伝統文化を破壊することになったのであります。

先ほどもちよつと触れましたが、明治政府の外交というもの、世界が西欧列強と植民地に二分されている状況においては、欧米並みの強国になる他に生きる道はないというところで、「富国強兵」「国家の近代化」政策を強力に押し

進めました。ところが民間からは、アジアの自由・独立を守るためにアジアの力を合わせて欧米に対峙せよという「アジア主義」が生まれて参ります。中江兆民や玄洋社等がこれに当たりますが、なканずく東亜同文会は、中国が瓦解することは日本の安危に直接つながることを憂慮し、日中提携して中国保全を図るという、理想主義的外交を主張しました。そしてこれに必要な人材育成のために上海に東亜同文書院を開設したわけです。

これに関して申し上げたいことは、二〇世紀の初頭に約一〇年間、日中黄金時代というものが続きました。この時代は多くの中国人留学生、周恩来や蒋介石、後に有名になる多くの方々が日本に来て、日本が継承した西欧文化を学んで帰り、中国における改革・革命運動に大きな影響を与えたのです。その当時弱体化していた清国で内部的に改革を行おうとする康有為や梁啓超による自強運動が起こります。同時に孫文や黄興による国民革命運動が行なわれますが、いずれも失敗して彼らは日本に亡命しておりました。

日本の官民は彼らに対して陰に陽に援助を与えましたが、なканずく東亜同文書院の山田良政・純三郎の兄弟は、命をかけて、また生涯をかけて、孫文の手足となってその革命運動を援助しました。そして一九一一年の辛亥革命が成功し、清朝が滅びて中華民国が成立するのが一九一二年であります。

二、以上のような時代背景を念頭に置いた上で、「東亜同文書院出身者と日中関係」のテーマに入ることとします。が、お手元に配布したレジュメをご参照下さい。東亜同文書院の第一期生が卒業したのは一九〇四年（明治三七年）

です。それ以降終戦まで、書院で学んだ人は約五千名にのぼりますが、それらの人々が卒業後活動した分野は各方面にわたります。その分野はやはり日中関係を主軸にして、外交界、言論・報道界、学界、実業界、貿易、金融、満鉄、満洲国、その他多くの分野でございます。

当然のことですが、その活動は戦前が最も盛んでありました。戦後は、一九七二年（昭和四七年）の日中国交回復後、本格的活動が中国と書院出身者との間で再開されたのですが、終戦から国交回復までの間においても中国との間で、あるいは東南アジアで、書院出身者の絶え間ない活動が行なわれておりました。

(一) 分野別に申し上げますと、まず最初に孫文の国民革命運動を支援した山田良政・純三郎の革命運動というものが挙げられます。

(二) 次に外交界ですが、外交界は一期生から毎年数名ずつが外務省に入りました。そして中国理解に裏打ちされた書院出身者の現地活動、あるいは中央での活動というものは、日中外交史に大きな貢献をしたと考えられます。現在中国にある在外公館は北京の大使館、それから総領事館が上海、広州、瀋陽と、これくらいしかありませんが、戦前の昭和一七年には中国に大使館・総領事館・領事館・分館などの在外公館は三八か所ございました。このいずれの公館においても同文書院出身者が活動しておりました。

レジュメに載せましたのはその中のごく一部の方のお名前でありまして、他にもたくさんおられます。あとで実業界その他の分野についてもお話ししますが、いずれにしても一々名前を挙げるわけにいきません。ここで触れるのは

ごく一部に過ぎませんが、例えば第二期生に林出賢次郎さんという方がおられます。この方は日露戦争の最中に卒業したのですが、当時日英同盟が締結されており、イギリス側から、日本政府に対し中国の西北部におけるロシアの進出状況を調査してほしいという要請があつて、林出さんはその調査旅行に出かけるわけです。北京から出発し、約二年間かけて大変な苦勞を重ね、ウルムチ・イリに至り、調査を行いました。これはまさに書院の大旅行調査の走りでございます。私共が入学した時には林出さんはいもう外務省を退官して同文書院の学生監をしておられまして、私共薫陶を受けたのですが、非常な人格者でございました。外務省では最もよく中国を知る外交官として多くの貢獻をされ、中国人にも深い信望がありました。

次に若杉要さん(三期生)。この方は大東亜戦争勃発直前までの日米交渉で、アメリカ駐在の公使として、実質的に日米交渉を担当した方です。日中戦争を解決するためには米国の仲介が必要として日米交渉に心血をそそいだのでした。石射猪太郎さん(五期生)は盧溝橋事件が起きた時の東亜局長でありまして、出兵を阻止し、事件拡大を防ぐために非常な努力をされましたが、これを阻止できませんでした。石射さんは「今後ノ事変対策ニ付テノ考案」という、事変解決のための案を出されるのですが、非常に立派な内容で、今でも外務省で最も尊敬されている方です。この方については後ほどまた改めて申し上げたいと思います。堀内干城さん(八期生)。この方は経済問題に非常に詳しい方で、東亜局長、駐華公使を務められました。山本熊一さん(九期生)。この方は通商局長、アメリカ局長を兼任

し、外務次官、のちに大東亜次官にもなられました。対中国外交政策遂行の中樞となり、治外法権撤廃と平等な経済外交の推進に努力された方であります。清水董三さん(二期生)は私も薫陶を受けた、文人外交官として有名な方です。中国の文化に詳しく、「東翠」の雅号で書かれた書画は中国の文化人も認める素晴らしいもので、非常に尊敬を受けた方です。中山優さん(二六期生)。この方は新聞社に入り、のちに外務省嘱託となり、また近衛総理の側近ともなつた、まさに異色の思想家です。この方についても後にお話ししたいと思ひます。それから「岩井公館」で有名な岩井さんとか、その他大勢おられますが、時間の都合で割受します。

(三)次に学界ですが、当然のことながら中国で勉強した書院出身者には、中国問題に関する学者や研究者が多くおられます。特に四〇期以降、大学で教鞭を取る人達が多く、現在も取っておられる方がおられます。古くは満鉄調査部で令名を馳せた天海さん。あるいは大倉精神文化研究所長で東洋大学の学長をされた大倉さん。同文書院の先生で馬場欽太郎さん。この方は中国経済地理・商品学、それから交通学の大家でありまして、書院の学生の調査大旅行を指導した方です。小竹文夫さん。この方も書院教授であり、東洋史・東洋哲学の權威です。それから鈴木先生を始め熊野、坂本、福田、魚返、その他おられますが、いずれも書院の教授で中国語の大家でございました。多くの著書もございます。

(四)言論・報道界ですが、東亜同文会が設立されて最初の事業というのは、中国における学校の建設と新聞・雑誌

の発行でありました。当時の中国の漢字紙はもちろん日本より古いのですが、進歩は日本より遅れていました。それに清朝時代は言論の自由もなかったし、また治外法権によつて日本人は比較的自由にものが言えたということもあり、日本人が中国で漢字紙を発行することが多く、レジュメに掲げたような漢字紙が書院関係者によつて発行されました。

他方、日本の新聞界においては、書院出身者は非常にたくさん活躍されました。中国問題のエキスパートとして処遇され、東亜部長、論説委員等々となり、中国問題について論陣をはつたわけです。鳥井素川。この方は日清貿易研究所出身ですが、大阪朝日の編集局長をやつておられた時には、部下に長谷川如是閑、櫛田民蔵、大山郁夫など錚々たる人物を集め、新思想の鼓舞に努めたのです。松本忠雄。

この方は日本タイムズの社長になられましたけれども、中国に関する資料や蔵書の所有は杉大で松本文庫として有名でした。波多博さんは私が上海にいた時の大陸新報の社長です。それから大阪朝日中国部長・論説委員の神尾茂さん、東京朝日中国部長・論説主幹の大西斉さん、「支那時報や外交時報」を主幹した宇治田直義さん。東京朝日から外務省嘱託となつた中山優さん。毎日の上海支部長から政治部長・編集局長となつた吉岡文六さん、朝日の上海総局長から論説委員・東亜部長をつとめた和田斉さんなどまさに多士済々でした。田中香苗さんは毎日新聞の東亜部長で、後に社長になられました。戦後中国に対して土下座報道をやるなどということでは信を貫いた方でございます。とにかく錚々たる先輩が論陣を張られたことを覚えていきます。

ここで一つ特筆しておきたいのは、戦後中国、アジアの激動時代に書院出身のジャーナリストが常に第一線にあつて、報道界をリードしたということです。一九六六年の文化大革命に際して、日中記者交換協定により北京にいた日本人特派員九名のうち四名が書院の出身者であり、壁新聞の中から重要情報を読み取つてそれを世界に発信したことが、非常に高く評価され、ボーン賞を受賞しました。

(五) 次に実業界ですが、これはまさに書院出身者の本命と言えますか、大多数の人が貿易商社、海運、紡績、金融その他の実業界で、大いに日中関係に貢献する活動をされたのです。日中経済交流の先覚者とも言うべき人は、日清貿易研究所出身の白岩龍平さん、後に東亜同文会の理事長になる人ですが、この方は大東新利洋行という日中合弁の船会社を作りました。それから上海瀛華洋行という個人企業を経営された土井伊八さんも同研究所出身です。このお二人は日中経済開拓の草分けかも知れません。その前には日清貿易研究所を設立した荒尾精らを後援した岸田吟香の樂善堂がありました。

このレジュメには商社関係、海運関係、紡績関係というように分野別に、入社された方の人数を入れてあります。三井物産七〇名、三菱商事六〇名、その他数十名がそれぞれに社に入つて活躍されたわけですが、その中から幹部になられる方、社長になられる方がたくさん出ておられます。トーマンの社長になられた香川さん、あるいは丸紅で社長になられて最近まで活躍しておられた春名さん。今日来ておられると思います兼松の社長の小田さん。その他大勢おられます。

紡績関係は中国で非常に急速に伸びた産業でありまして、上海にたくさん紡績関係の会社がありました。そこにも書院出身者が多くおられます。大日本紡（ユニチカ）では原吉平さんが、長い間社長をしておられました。戦後原さんは積極的に日中貿易の開拓をされ、オリンピックで優勝しましたニチボー貝塚のチームを連れて向こうへ行かれ、周恩来とも会い、日中交流を図られたというようなこともございます。原さんはジェットロ（日本貿易会）の理事長を二期務めておられます。日清製油の坂口さんは、これもまた非常に長く社長をしておられます。その他いろんな会社に書院出身者の活躍が見られます。

金融界については、戦前は上海に横浜正金、台湾銀行、朝鮮銀行ぐらいいしか出ておりませんでした。横浜正金は今日の東京三菱銀行の前身でございますが、ここに入られて要職に上られた方が相当おられます。満洲国ができて満洲中央銀行ができました。これは満洲唯一の中央発券銀行であり、ここに相当たくさん書院関係者が入っておられます。

満鉄は日露戦争の翌年に設立された満洲経営の会社であります。鉄道を中心として、鉱山、鉄鋼、農業その他の経営をしたわけですが、書院生はあまり入らなかつた。と言うのは、初めは何か官学中心のような雰囲気があつて書院生にはなじめなかつたと言うんですけれども、例えば天海さんのように調査部門で非常な成果を上げたということもあり、満鉄は書院生の入社を強く希望したわけです。その結果一九二〇年（大正九年）から書院に対する満鉄給費生派遣制度というものが実施されることになりました、その

結果その後約一三〇名が入りました。

満洲国というのは日本の侵略による傀儡国家と一刀両断に言われ、まあその通りであります。建國にあつた理想像は「王道楽土」「五族協和」であり、日本の民族の立場を超えた崇高な、真剣なものがあつました。これが書院生の情熱をかきたて、「満蒙自治」「民族協和」という建國理念に参加しようという者が二四〇名に及んだわけです。これは前述の満洲中央銀行などを含めての話であります。この満洲国ができたことにはそれなりの歴史的な経緯があります。満洲事変が起きた当時の日本は非常な不況でありました。日本のどん底の社会的窮状が、軍部に昭和維新、国家改造を叫ばしめ、大陸進出を實行せしめた原因になつたと言われています。不況であつたがゆえに卒業しても就職できない。そこへ満洲国ができたというので、やはり書院生といえども霞を食つて生きるわけにはいけません。まして中国をよく知る書院生は満洲国にとつて最も必要とした人材であつたらうと思ひます。

戦後の日中貿易ですが、一九七二年（昭和四七年）の日中国交回復までの日中民間交流について申し上げたいと思ひます。昭和二七年に高良とみさん他二名の国会議員がモスクワ経由で北京に入りまして、第一次民間貿易協定を結びます。昭和三〇年に日本から実業団の第一次訪中団が中国に入ります。団長は岡崎嘉平太さんで、全国から選ばれた六〇名の団員の中に書院の出身者が六名おりました。団長通訳は私と同期の大久保任晴君が担当しました。彼はその後もうるんな人が中国に参りますと、周恩来その他要人との通訳を担当しました。大久保君は我々の同期ですが中

日学院の出身で、中国語の能力は抜群のものがありません。昭和三七年に日中覚書協定が成立しますが、これは日中覚書事務所設立と、日中記者交換協定を含みます。大久保君は日中覚書事務所の専務理事になりました。その後毎年協定交渉に従事しましたが、これが日中国交成立までのパイプ役という重要な役割を果たしました。この貿易方式は日中経済協会に継承され、大久保君はその専務理事として活躍しました。昭和五三年に日中長期貿易協定が調印されて漸く軌道に乗るわけですが、昭和五年当時、中国貿易に従事していた書院出身者は五〇名ぐらいいただろうと言われております。大久保君は残念ながら昨年亡くなりました。

戦後台湾を始め東南アジアで活躍した書院出身者は非常に多かったです。日本は昭和二六年にサンフランシスコ講和条約を締結しますが、これにソ連、中国（中華人民共和国）、それから中華民国（台湾）は参加しませんでした。それでアメリカ側からの要請によって日本は台湾の蒋介石政権との間に日華平和条約を締結するわけですが、その準備に台北に在在外事務所を開設するため、中田豊千代さん他二名の書院出身者が派遣されました。その後開設された大使館にはいつも同文書院出身者が四〜五名おりました。書院の出身者が戦後政府・民間の尖兵となって多数台湾に渡り、経済発展に寄与した功績は大きいと思います。その当時私は東南アジアの各地を回りましたけれども、台湾を始め香港、シンガポールその他各国の大使館、総領事館、商社等に、驚くほどたくさん同文書院の出身者がおられたというところは、日中提携を夢見た書院生の自然の成り行きではな

かったかと思えます。

ここで先ほどの石射猪太郎さんについて申し上げたいと思います。石射猪太郎さんは書院の五期生で、盧溝橋事件が起きた時に東亜局長をやつていて事件の拡大阻止のために大いに努力された方でありました。石射さんは、広田外務大臣に出兵反対の嘆願書を渡した。「軍の動員は日中関係百年の計に回復し難い事態を招く」という悲痛な嘆願書でしたが、閣議での動員阻止ができず、彼は落胆しました。その後広田外相から宇垣外相に代ると、石射さんは「今後ノ事変対策二付テノ考案」なる長文の意見書を提出し、事変の收拾を図ろうとして、宇垣外相の賛同を得ます。宇垣外相も事変解決に強い希望をもちこの案を五相会議にかけます。結局これは通らなかつたのですが、これももし通つていたならば、その後の日中関係は確実に変わつていただろうと思われれます。

私がよく知っている三宅喜二郎という外務省研修所長が「支那事変の研究」というものを書いておられますが、その中に、「当時外務省にこのように視野が広く、識見秀れた勇氣ある方がおられたことをここに特筆しておきたい」と石射さんを讃えて記しています。それから同盟通信の上海支局長をやつておられた松本重治さんの「上海時代」という有名な回想記の中でも「石射局長というのは大局を見る目のある外交官だ」と書いてあります。もとフィリピン派遣軍の参謀副長で国際派として知られた宇都宮少将がその著書「黄河、揚子江、珠江」の中でこういうことを書いています。「上海総領事であつた石射さんというのは陸軍とは非常に肌が合わなかつた」。そして「東亜同文書院か

らは異色の中国通、特に外交官が多数輩出したことで有名だ。外交官の第一号は石射猪太郎氏、次いで若杉要、堀内干城、山本熊一氏等が顔を並べている。これらの人は一癖も二癖もある人物ばかりで、外務省に人なしなどと悪口を言われたあの時代に、敢然として軍部に桶突いて気を吐いたことは、いかに同校が真の人材教育に努めたかを如実に物語るものと言えよう。国民党員の山田良政・純三郎兄弟も同校の出身者である」。

それから先ほど申しました丸紅の社長をやっておられた春名さんのことについてもここに書いてあります。それは戦争中のフィリピンでは、軍政を敷いていて、軍政監部政務班というのがあった。フィリピンには華僑が多かったので、その華僑を管理するために政務班があった。戦後東南アジアで実に多くの日本人戦犯が出た中で「フィリピンの裁判において軍政監部の華僑関係者からひとりも犠牲者が出なかったのは、華僑担当の同文書院出身の春名和雄君の指導よろしきを得た賜物だったと信じている」と述べられています。

石射さんに関連しまして、橋川文三という評論家が石射さんの回想録「外交官の一生」について書いていますが、この中で石射さんについて「彼は立派なことをしたけれども、彼がやはり東亜同文書院の出身者であったことは記憶に留めてよいことだ。同文書院は近衛篤磨を代表とする東亜同文会によって上海に設立された学校だが、この学校の建学精神は岸田吟香、荒尾精、根津一など、中国問題への先覚者の事跡を踏襲し、「一は以て中国富強の基を樹て、一は以て中日輯協の根を固む。期するところは中国を保全し

て東亜久安の策を定め、宇内永和の計を建てるにあり」というものであった。即ち義和団事件以来列強の中国分割の形勢が進行するのに対抗して、いわゆる「中国保全論」の立場から、日中の学生を教育しようとするものであった。ただこの頃から日本の対アジア政策は帝国主義の傾向を強め始めたため、同文書院出身者は後にしばしばその手先のように見られることにもなったが、その建学精神はどこまでも中国を援けてその改造を促進し、日中友好を基礎としてアジアの平和を追求するという善意であった。石射猪太郎という一外交官の生涯は、その建学精神を最も好ましく体現したものと言うことができる」と書き、「失敗に終わった日中間の戦前外交史において、わずかに、私達が慰めとして見出しえるものは石射の存在であったといえよう」と記しています。

敗戦後、石射さんはビルマ大使だったという形式的理由のために戦犯に指定されましたが、その免除を求めて、幣原喜重郎元外務大臣が「石射猪太郎氏の思想と行動について」という特免申請書を書いておられます。そこには「私が官界から引退して後も、石射氏は常に私のところに入入りしていたが、いつも石射氏の意見には終始平和主義、国際協調主義、非軍国主義の調子が強く表現されていた」と書かれています。書院出身者の思想・行動を代表するものとして石射さんのことに時間を割いた次第です。

中山優さんのことなど話したいことはたくさんあるのですが、時間が来ましたのでここで一応止めさせていただきます。ありがとうございます。

【配布資料】（小崎昌業）

一、一九〇四（明治三七）年卒第一期生から一九四五（昭和二〇）年終戦時の在校生まで四九〇〇余名。書院建学精神（興学要旨、立教横領）に根ざす、その活動は官民各方面にわたり、その分野は日中間係を主軸とする舞台で、外交、言論・報道、学界、実業、貿易、金融、満鉄、満洲国その他。一九七二（昭和四七）年の日中国交回復後、本格的活動が再開されたが、それ以前においても、中国との間で、また東南アジアで絶えざる活動があった。

二、革命運動

山田良政・純三郎（一）、孫文の国民革命運動支援

三、外交界

第一期から毎年数名が外務省に入る。中国理解に真打ちされた書院出身者の現地活動は日中外交史に大きな業績を残した。（戦前の在中国公館は三八ヶ所）

林出賢次郎（二）大旅行の嚆矢

若杉要（三）駐米公使、日米交渉

石射猪太郎（五）東亜局長、「今後ノ事変対策ニ付テノ考案」、今も外務省で最も尊敬されている外交官

米内山庸夫（八）孫文を支援、陶磁の世界的研究家

堀内干城（八）東亜局長、駐華公使

山本熊一（九）通商局長、アメリカ局長、外務次官、大東亜次官

波多野乾一（九）中国共産党研究の世界的権威

清水董三（二二）文人外交官
中山優（二六）異色の思想家

岩井英一（一八）「岩井公館」

中山豊千代（二〇）中華民國公使

岡田晃（三六）香港総領事、ブルガリア、スイス大使

四、学界

中国問題に関する学者・研究者が多く、特に四〇期以降では大学で教鞭をとる者が多い。

天海謙三郎（三）満鉄調査部で著名

大倉邦彦（三）大倉精神文化研究所長、東洋大学学長

馬場鞞太郎（五）書院教授、中国経済地理・商品学、調査大旅行を指導

小竹文夫（一九）書院教授、東洋史・東洋哲学の権威

鈴木擇郎（二五）熊野正平（二七）坂本一郎（二〇）

福田勝蔵（二〇）魚返善雄（二七）いずれも書院教授

で中国語の権威

五、言論・報道界

中国の漢字紙の起源は日本より古いが、進歩は日本より遅れ、清朝時代は言論の自由もなかったため、日本人が中国で漢字紙を発行すること多く、また、治外法権によって日本人は比較的自由にモノが言えた。（東亜同文会の最初の事業は中国における新聞・雑誌の発行）書院関係者が経営した漢字紙の例。宗方小太郎の「漢報」「閩報」。白岩竜平の「亜東時報」。一宮房次郎の「順天時報」。山田純三郎の「民国日報」「江南晚报」等。

日本の新聞では書院出身者は中国問題のエキスパートとして遇され、東亜部長、論説委員等となり、中国問題に論陣をはった。多士済済であつた。

鳥井素川(特) 大阪朝日編集局長

水野梅暁(一) 一支那時報

松本忠雄(六) 日本タイムス社長

波多博(六) 上海「大陸新報」社長

神尾茂(六) 大阪朝日 中国部長・論説委員

大西斉(八) 東京朝日 中国部長・論説委員・論説主幹

宇治田直義(一三) 「東方通信」「支那時報」「外交時報」

里見甫(一三) 「滿洲国通信」

中山優(一六) 東京朝日

吉岡文六(一九) 毎日 上海支局長・政治部長・編集局長

和田斉(二一) 朝日 上海総局長・論説委員・東亜部長

田中香苗(二五) 毎日 東亜部長・社長

戦後、中国・アジア激動の時代に書院出身のジャーナリストが常に第一線にあつて報道界をリードした。一九六六年「文化大革命」に際し、日中記者交換協定により北京にいた日本人特派員九名のうち、朝日、毎日、中日、共同の四名は書院出身であり、壁新聞から重要情報を選んで世界に発信し、ポーン賞を受賞した。

六、実業界

書院出身者の大多数が貿易商社、海運、紡績、金融その他の実業界で日中関係に貢献する活動に従事した。日中経

済交流の道を開いた先覚者的存在は、白岩竜平(大東新利洋行)と土井伊八(上海瀛華洋行)

(一) 商社関係

三井物産(七〇名入社)、三菱商事(六〇名)、大倉

(二八名)、古河(五七名、社長や幹部が多い)、日商

岩井(四九名)、住友(三二名)、トーメン(四五名、

香川秀史(二四) 社長)、伊藤忠(七〇名)、日綿実業

(四〇数名)、丸紅(二七名、春名和雄(三六) 社長)、

金商又一(二九名)、兼松江商(五五名、小田啓二(四

四) 社長)

(二) 海運関係

日清汽船(二四名)、東亜海運(約三〇名)、大連汽船

(十数名)、山下汽船(九名)、日本郵船(二七名)

(三) 紡績関係

大日本紡(ユニチカ)(二八名、原吉平(一八) 社長)、

鐘紡(二七名)、帝人(五名)、東洋紡(七名)、同興

紡績(四〇名)、立川正文(四二) 社長)、富士紡(四

名)、豊田紡織(二名)、上海紡(二名)、北支綿花協

会(理事長以下五名)

(四) その他の会社

日清製油(二三名、坂口幸雄(二二) 社長)、華中鋳

業(三〇名)、満洲航空(六名)、中華航空(三名)、満

洲電業(一八名)、華北電業(六名、内藤熊喜(一) 副

総裁)、東洋拓殖(二六名)、東亜興業(七名、白岩竜

平常務)、大冶鉄山(四名)、東亜煙草(四名)

(五) 金融界

横浜正金(三九名、要職が多い)、台湾銀行(二二名)、

朝鮮銀行（一九名）、日銀（二一名）、住友銀行（二八名）、要職が多い）、三井銀行（八名）、三菱銀行（七名）、日本興業銀行（三名）、満洲中央銀行（七十七名）、満洲興業銀行（八名）

七、満鉄

一九〇六（明三九）年設立の満鉄には、当初書院出身者は少なかったが、調査部門で貴重な成果をあげた。満鉄は書院生の入社を強く希望し、一九二〇（大九）年から満鉄給費生派遣制度が実現。これにより入社せる者一三〇名。

八、満洲国

満洲国は日本の侵略による傀儡国家と言われるが、建国に当たっての理想像「王道楽土」「五族協和」には、日本の民族的立場を越えた真摯なものがあり、これが書院生の情熱をかき立て、「満蒙自治」「民族協和」という建国の基本理念の実現に参加する者二四〇名に及んだが、挫折した。

九、戦後の日中貿易

一九七二（昭四七）年の日中国交回復までの日中民間交流。

昭二七年六月 第一次民間貿易協定。昭和三〇年九月

日本実業団第一次訪中団（岡崎嘉平太団長、六〇名中、書院出身者六名、団長通訳は大久保任晴（四二））、昭和三四年 村松謙三訪中、昭和三五年高崎達之助訪中、昭和三六・三七年岡氏訪中、昭和三七年十一月日中覚書協定成立（覚書事務所、記者交換も取決）。大久保は日中覚書（L.T貿易）事務所専務理事。協定交渉は毎年難航

したが、日中国交成立までこのパイプは日中をつなぐ重要な役割を演じた。この貿易方式は日中経済協会に継承され、大久保はその専務理事となる。昭和三三年 日中長期貿易協定調印。昭和三五年当時、約五〇名の書院出身者が中国貿易に従事。

一〇、戦後、台湾はじめ東南アジアで活躍した書院出身者。

昭和二七年四月 日華平和条約が締結されたが、その準備のため台北に在外事務所を開設するため、中田豊千代（二〇）ら書院出身者三名が派遣された。その後開設された大使館には清水（一二）参事官以下書院出身者が四〜五名いた。

書院出身者が戦後、政府・民間の先兵として多数台湾に渡り、経済発展に寄与した功績は大きい。当時、台湾はじめ香港、シンガポールその他東南アジア各国の大使館、総領事館、商社等に驚く程書院出身者がいたことは、日中提携を夢みた書院生の自然の成行の国際的活躍であった。

小崎昌業（おさき まさなり）

一九二二年中国・青島生まれ

東亜同文書院大学（四二期）卒、愛知大学（二期）卒
外務省に入り、中華民国、インド、カナダ、シンガポール、ポーランド、モンゴル、ルーマニア等に在勤、駐モンゴル大使、駐ルーマニア大使。
前（財）霞山会 常任理事。

藤田

どうもありがとうございました。ただいまの小崎先生のご発表を伺って、お聞きになりたいことがございましたら拳手をしてご質問をどうぞ。……一番最後にも質問の時間を作りたいと思いますので、ないようでしたら最後のほうに回させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きまして栗田先生にお願いします。タイトルは「近代史の中の東亜同文書院」です。先生は近代史の視点から、東亜同文書院の研究をすすめてこられました。その中で愛知大学でも時々講演をしていただきました。先生は、新しい目で東亜同文書院を調べていこうというご研究を進めておられると私は解釈しております。今日は盛り沢山の資料がございます、短い時間で恐縮なんですけれども近代史の中で東亜同文書院の位置づけを発表していただきます。では早速お願いいたします。

